



親鸞聖人750回大遠忌



科学は宗教の代わりにはならない

田中教照(た なか きょう しょう)

人間は「なぜ」と問う存在です。「なぜ」の答えを探し続ける存在です。「なぜ」の答えがわからないと心を落ち着けることができない存在です。それは出来事にある意味を見出さないと済ますことができない、ということです。

近代において科学技術がこれほどまでに大きな意味を与えられたのは、人間の欲望を満足させることができたからです。ということは、欲望の満足には単純に「意味」が見出されるということです。健康でいたい、長生きしたい、たらふく食べたい、樂をしたい、など、だれもが共通に抱えている願望を実現した科学技術は、わたしたちの生活の多くの部分に入り込んで意味づけをし、わたしたちにとってなくてはならない存在になりました。今や、わたしたちは、科学技術の恩恵なしには暮らせないようになりました。

しかし、よく考えてみると、科学技術の恩恵だけでは、わたしたちの人生は完結できないのです。科学技術は、繰り返される事実を根拠に、もっとも確実な出来事の法則性を明らかにし、意味づけてくれましたが、たった一度しか起こらない出来事については何も明らかにしてくれていないのです。早い話が、「わたし」という天にも地にも後にも先にも一人しかいない存在について「このわたしがこの日本という国のただ今の時代に生を享けたということにはどんな意味があるのか」とみずからに問う人に科学は何の答えも与えることができないのです。

さらに、人間にとってもっとも深刻な悩みは、自分だけに降りかかる悲劇的な出来事です。たとえば、事件や事故によって大切なわが子を失うというような出来事。そこまで深刻でなくても、今この時点で病魔に襲われることなど、このような出来事に遭遇して人間は「なぜだ！」と叫ばずにはられません。しかし、科学は、何も答えません。せいぜい「偶然」あるいは「運命」としか言えないのです。

このことに答え得るものは、人知ではなく、人知を超えた視座からの意味づけしかないと思います。それが宗教というものです。宗教なしには、このような人生に起こるたった一回の出来事に意味を与えることはできないのです。

浄土真宗では、「弥陀の御もよほし」(『歎異抄』第6条)とか「如来の御はからひ」(『同』第11条)あるいは「御催促」という言葉に示されるように、わたし一人に降りかかってきた出来事を阿弥陀さまからのご縁、はたらきかけと意味づけしてきました。どのような出来事もそれを通して人知を超えた世界、仏さまのおさとの世界へ目覚めるご縁が与えられてこそ、無駄ではなかったということになります。

わたしたちの人生は、目に見えないはたらきが加わって人生を彩っているということ。

また、目に見えないものこそわたしたちにとって大切なものであることを、仏さまという目に見えないものを^{わが}拝むことを通して教えています。「いのち」も「こころ」も「きずな」も「信用」も目に見えませんが、これらを失えば、生きる意味も失われるのです。だから、これらの一つひとつが大きな意味をもっているということが、仏さまを拝んでいくとき、自然と実感されてきます。それは仏さまのお智慧をいただいてそのことに気づかされていくのです。

また、死という厳粛な出来事、人間がもっとも忌み嫌う出来事すら、それがさとりと救いへの入り口となれば、けっして無意味なことではなくなります。すべての人々が死を^{まぬが}免れないのであってみれば、わたしたちは人生の最後にはどこかに向かわねばなりません。そればかりか、わたしたちは、最愛の人が先立っていくとき、その人をどこに送ればよいでしょう。亡くなった人はどこにいったと言えよよいのでしょうか。わたしたちは死を自分のこととしてしか考えないところがありますが、むしろ、愛するものの死をこそ、まず考えるべきでしょう。

科学は死後の世界を考えることができませんから、死後の世界を否定したり、この世だけで説明しようとしませんが、それでは、最愛の人を失った人は心を落ち着けることができませんね。やはり、仏さまの世界、お浄土に往かせてもらったということできなければ、ご遺族はその後の人生において、死者との関係をうまく続けていくことができないと思います。

このように考えると、科学が扱えない出来事を宗教が^{にな}担っているのだということに気づきます。繰り返される事実よりも、たった一回の出来事こそ、わたしたちの人生において決定的で、抜き差しならない出来事であり、わたしたちはこの出来事に遭遇してなお科学に頼ろうとする愚かさを早く捨てなければなりません。

いよいよお迎えする親鸞聖人 750 回大遠忌のご勝縁は、あらためて、浄土真宗、親鸞聖人が明らかにしてくださった阿弥陀仏さまの願い、この願いに願われている私であることに気づかされ、力強く生きる勇気を与えられる機縁となるのではないのでしょうか。

(武蔵野女子学院長)